
秘密結社

ムダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密結社

【Nコード】

N5613P

【作者名】

ムダ

【あらすじ】

ベルデンの街に「それ」が現れたのは、夏の終わりごろだった。

「それ」は、空に浮かぶ城。

悪魔の仕業か、天の御子か。

「それ」を見た人々は、誰もが話のタネにした。

そこから始まる、人間と魔族の戦いの物語。

キャラ紹介

キャラクター

イザーク この物語の主人公。ベルデンの街に浮かぶ飛空城を調査するためにやってきた。さすらいのベテランハンター！…のはず。割とモテる。

カイダ イザークの弟子。前にイザークが魔物がらみの事件を解決した時に付いてきた。その事件で両親が死んだため、肉親はいない。イザークのことを先生と呼んでいる。

トレロ イザークがベルデンに着いたときに、真っ先に会う人。まだ駆け出したが、立派な一人前ハンター。実戦経験がまだない。習った武器は槍とクロスボウ。結婚対象は12才以下でできれば女というアブナイ人。こいつのせいでイザークも変な目で見られる羽目に。

ロック 備兵の国、ビスランドから来た備兵。ニンゲツ市長の備兵。なんかごついが、仲間にするると大助かり。

ニンゲツ市長 ベルデンの市長。過去の栄光にしがみつき、愚痴ばかりで仕事しない。飛空城のおかげで最近街が繁盛したが、それが魔物の仕業とは知らずにいるめでたい人。

ゲンティン 子供たちをさらってく山賊たちの親玉。しかしあまり強くない。主人公にザム団のことをベラベラ言いすぎたため、八キムにお仕置きされ魔物にされる。でも、やっぱりあんまし強くない。

シアン・シンジョーネ 体がケタ違いの虫でできているべっぴん者の魔族。ザム団の中心核の三人のうちの一人。虫の数は何兆どころじゃない。ちなみに虫は全部人の死体を食す虫。

ハキム 魔法使い。使えないゲンティンを魔物にした張本人。シアンと同じで、ザム団の中心核のうちの一人。変身したら呪いのスカラベという魔物になる。ちなみにスカラベはフンコロガシのため、直訳すれば呪いのフンコロガシになる。でも強い。

ソネ・ミューラー 千五百年以上生きるごつい長生きの魔物。なんと、遺跡などに自分の壁画があるほど長生きのおじさん。イザークたちとタイムン張れるほどの元気な人。絶頂期だと、イザークは一瞬で消えるかも。スピルザクというサソリの魔物。やはり強い。ザム団の実質的なリーダー。

ヘルモンド 元は高貴な魔物ハンター。でも死んだ。その時に、ザム団の中心核三人組に墓の場所を突き止められ、行き変えさせられたが、その際に自分は虫の魔物だと教え込まれた。偽りとはいえない。応リーダーだが、やはりよわい。

トモ・コモリー イザークが止まる宿屋のおかみ。両親とは早いうちに死別。昔はドラゴンにさらわれた王子様を助けて結婚するのが夢だった。いろいろ間違ってるが、今は宿屋に泊りに来た王子様と結婚する夢に。中身は変わってない。ちなみに、鍋を焦がすなど、料理とサービスマンは期待できない。

カリムー 元役人の農家。物語のカギを握る、地下水道について何か知ってる人。

カメダ 毎回毎回各物語の主人公に突っかかるが、毎回毎回扱いが

悪くなり、とうとう今回は魔族にいじめられる役に。

ベルデンの街

「さて、ここがベルデンか」

ここがシロタ会長の言っていた飛行場のある街か……。しかしまあ、…さびれた町だな。

「先生、今回はここで何をやるでやんすか？」

こいつはカイダ、前の依頼の魔物がりでいった街で付いてきた子供だ。

俺のことを先生と呼んでいるが、何故かはわからない。

「お待ちしていました。あなたがイザークさんですね」

「お前は…」

「トレロです。よろしく願います」

トレロねえ…。

「まだ駆け出しですが、槍の腕は一人前ですよ。まあ、あくまで自称ですけどね」

あくまでねえ…。

結構使い手のようにもみえるが…。

「俺も槍は得意だよ。今度、教えてやるうか？」

「いえ、結構です」

さっぱりと断られたな…。
ま、別に気にしてないけど。

「先生の指導はわかりやすいでやんすよ？」

「いや、別にいいですから」

「勿体ないでやんす…」

「おいおい、バカなやり取りしてないでさっさと宿に行くぞ」

カランコロン

宿の扉をあける音が響く。

小柄な宿だが、値段も手ごろだったので、ここで当分は居させてもらおう

「こんにちわ。お泊りですか？」

「ああ、当分の間居させてもらおう。どこかいところはないかな？」

「それなら253号室ならどうですか？景色もきれいですし、海も見えますよ？」

「じゃあそこで」

「あ、はいどうぞ」

さてと、ここでしばらく居させてもらおうわけだが…

「狭いでやんすね、ここで三人とまるでやんすか？」

「まあ、しょうがないだろう、そんなにお金がないんだから」

「…おい、お前らは違う部屋だぞ」

なぜこいつらも入ってきているのやら

狭いの当然だろう、ここは一人部屋なんだから。

「じゃあ、おいらたちはどこの部屋でやんすか？」

「…ここにあと二つ分の部屋のカギがあるだろ」

「選べ…ということですか」

「それ以外に何かある？」

もう寝た方がいいから、と2人を部屋から追い出した。

…明日は早いからな

街の異変

「お久しぶりね、イザーク」

「…リンか」

なんてことだ…。

このベルデンでもこいつの世話になるとはな…。

「そんな嫌そうな顔しなくてもいいじゃない」

当たり前だ…

お前のよこす情報にはロクなものがないからな…。

「全部、声に出てるわよ」

「フン、まあいい。で、俺の前に出てきたということは、何かしらの情報があるんだろ？」

「堪がいいわね。その通りよ」

「（不本意だが）長い付き合いだからな」

「だから声に出てるわよ」

わざと声に出していつといつことに気付くことができないのか。まあ、こいつはプロの情報屋だからな。気付けないわけがない。

…もっとも、少しは妹離れをしてほしいが。

「で、良い情報があるんだけど、買う？」

「…いくらだ」

「500ペラよ」

…少し高いような気がするぞ…

「まあいい、ほらよ」

「確かに受け取ったわ。はい」

これは…

「最近、この街とこの街の近辺で起きている事件の詳細よ。子供がさらわれてるんだってさ」

「ふうん…。あの飛空城についての情報じゃないのか」

的外れだな。

こんな情報を手に入れたって…ん？

「！」

「アラ、気付いたのね」

「…確かに、500ペラの価値はある情報だな」

こいつをただのシスコンかと思っていたが…
やれやれ、少しは見直したぞ

「早く何とかしてね。アカネがさらわれなにか心配なんだから」

やっぱりただのシスコンじゃねえか

「…まあ、いずれにせよ、俺の任務であることには変わらないな」

「じゃあ、私はこれで」

そう言って、リンはどこかに消えた

「ただいまーと」

「先生、どこに行っていたでやんすか？」

「ああ、古い付き合いのやつのところへな」

不本意ながら、古い付き合いのやつであることには変わらない。
でも、あいつの情報は意外と役に立つがなあ。
不本意だが

「もうすぐ朝食ですよ。昨日は食べていませんから、俺は腹がぺこぺこだ」

「そう焦るなトレロ。飯は逃げんだろう」

「お待たせしましたー。ご飯ができましたよー」

待ちに待った朝食だ。

「さあ、たくさん食べるでやんすよー！」

「俺だってたくさん食うぜー！」

カイダとトレロが勢いよく食堂に駆け降りる。

「先生も早くしないとなくなるでやんすよー！」

「ああ、俺はいいよ。調べておきたいことがあるからな」

「それじゃあお言葉に甘えて先生の分もいただくでやんすー！」

ちとよ...11のリンからもらった情報によく目を通しておかないとな。

街の広場で

「まあ、リンから情報をもたらったはいいけど…、詳しいことはあまり書かれていなかったからな。広場である程度の情報は仕入れておかないと」

ドン！

何かにぶつかったような気がする。
だが、動じることはない。
ちよつと前から、動きが見えていたからな。

ガシ！

「おいおい、なんだ一体。スリか？」

「く…、捕まつたか」

みれば、まだ幼そうな子供じゃないか。
なんでこんな物騒なことをしているんだ？

「…誰に言われてやっているんだ」

「っ…！」

やはりあせつたか

「私の独断だよ。誰にも言われてないよ」

「嘘つけ。こんなことキミみたいな子供が独断でするわけがないだろっ。…言え」

「…ッチ、解つたよ」

舌打ちをしながら俺に事情を話します。
聞けば、ノースというやつからの命令だそうだ

「…そうか。子供に盗みをさせるようなやつはほっとけないな」

「もうこれ以上は言うことなんかないよ」

「ああ、もうこれ以上は言わなくていい。言わなくてもいいが、そのノースとやらに話がある」

「…連れて行け、ということか？」

「ああ、そういうことだ」

「ただいま、親分」

とってこの子が入ったのは古びた喫茶店。

親分とか言う丸坊主の太った男…、もとい、ノースに話しかけた

「お前か、こんなに小さい子に盗みをさせているのは」

「はあ、なんのことかな？」

「お、親分！」

こいつ…、こんなにあっさりで見捨てやがった…。

血も涙もないのかこいつには…

「第一お前は誰なんだ？」

「銀の盾の、イザークだ」

「！！！」

そう聞いて、ノースは、驚いたような表情に変わった。

「へえ、へえ、このたびはうちのマルチナがご迷惑をおかけしてすいませんでした」

あからさまに態度を変えやがって…

「このマルチナは、早いうちの両親に見捨てられていたところを私が引き取ったところで…」

「そ、そうそう、親分は悪くないんだ」

ノースを必死にかばうマルチナ。

でも、お前はただただ利用されているだけというのをこいつは知らないのか

「お詫びにと言わせちゃなんですが、偉大なるイザーク様、このマルチナをこき使ってくださいえ」

「え、親分、そんな！」

「…解った、こき使わせてもらおう」

特に深い考えはなかったが、マルチナをノースのもとに置いていてはいけない、という予感がしたからだ。

「解ったよ…。じゃあ、これからよろしくな、イザーク」

…何が怒るのは解らないが、この時、俺は嫌な予感がしていた。

その夜、俺は寝つけず、今朝マルチナと会った広場に向かおうとしていた

「フンフンフン」

どこからか声が聞こえる。

俺は、好奇心に負け、声の聞こえるところに行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5613p/>

秘密結社

2011年10月7日00時42分発行